Program 6月のプログラム

5/30(火)～2(金)

講義 旧約聖書概論 I 田崎 敏明師

旧約聖書全体を通して何が書かれているか、そこから神様が私たちに何を語られ、何を教えられているのかを学びます。

13(火)~16(金),20(火)~23(金),27(火)~30(金)

グローバル・リーダー・インターン 2017

日本語と英語を用いて共に学び、グローバルな視点で宣教に取り組む次世代リーダーを日本で養成することを目的として、昨年 6/14～ 7/12 に執り行われた、次世代リーダー養成プログラム「グローバル・リーダー・インターン」が今年も始まります。今回は、数名のアメリカ人が来日し、ゴスペルタウンに滞在しながら共に学びます。

学院長のデスクから

ペンテコステの主日を迎え、いよいよ聖霊に満たされた毎日をお送りのことと思います。

先月も報告しましたが、今月中旬から海外からのメンバーを加えての、Global Leader Intern（グローバル・リーダー・インターン）が始まります。宣教団体アジアンアクセスのご協力をいただき、今回は海外からも参加者があり、いろいろな面での広がりが期待されます。このプログラムが祝福され、学びと実践の中で学院生たちがその歩みを深めていくことができますよう、ぜひお祈りください。

皆さまの主とともに歩む毎日が、御霊に満ちあふれたものなりますように！

学院長　永井信義

編集後記

ハレルヤ !! 今回の編集後記は、本編でもレポートされている、ジョン・コー師による特別講義のなかから、もう一つ皆さんにシェアさせて頂きたいと思います。

人が神の命令に背き、禁断の果実を食べてしまうという、おそらくクリスチャンじゃなくても知っている人が多いと思われる有名なストーリー。キリスト教界では「原罪」と言われたりしますが、このとき園の中央には、「命の木」と「知識の木」の2本の木があり、神様が食べてはならいと言ったのは、「知識の木」の実だけで「命の木」からは取って食べても良かった。実は、この2本の木は今でも私たちの前に置かれていると、ジョン・コー師は言います。そして神様は、私たちに「命の木」を選んで欲しいと思っていると。その「命の木」は神様との関係であり、「知識の木」は情報や経験など知識に頼ることで、神様から離れることになる。神様と共にいるなら常に良い状態にあったはずが、「知識の木」の実を食べ、善悪を自分で判断するようになった。全ての「宗教」はここから始まったと言います。「こうすれば良い」「こうしなければならない」……「宗教」とは、自分の力で聖くなろうとすること。つまり神になろうとすることで、それは最大の罪。残念ながらクリスチャンも宗教的になっている場合がある。

私たちは、宗教的な生き方ではなく、神様との親密な関係に生きることを選ぶ、つまりは「命の木」を選んで生きる者として歩んで行きたいものです。

最後に、神様がアダム達を、「命の木」から取って食べない様にエデンの園から追放した理由について、ジョン・コー師は、こう語って下さいました。「それは、人が罪のある状態で永遠の命を得て、罪に支配されたまま生き続けることのない様にするためであり、その魂の救いのためです。それは他の何でもなく、ただ神の深い愛と哀れみによるのです。」

東海林 真

Magnify 拡大宣教学院 機関紙 マグニファイ ■発行人：永井 信義 ■編集：東海林 真

〒981-3604 宮城県黒川郡大衡村ゴスペルタウン 022-345-2991 022-345-2992
gospeltown@infoseek.jp 郵便振替：02240-7-34622 facebook「gospeltown」

拡大宣教学院 GOSPEL TOWN

Kakudai Mission Institute No.346

Magnify

拡大宣教学院 機関紙 マグニファイ

また、炎のような分かれた舌が現れて、ひとりひとりの上にとどまった。すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話しだした。 使徒の働き 2章3節、4節

CONTENTS

巻頭メッセージ
タイトル
阿見 高洋 師

イベントレポート
イースター・フェスティバル

特別講義レポート
講師
ジョン・コー師

BOOK あらかると

6
2017 Jun.

ネットワークで宣教する

イエス・キリスト福音の群 プレイズ・コミュニティー・チャーチ 牧師 **阿見 高洋 師**

これからの日本の宣教を考える時、大切なキーは「ネットワーク」ではないかと、特に2011年の東日本大震災で被災して以降強く思わされています。

東京基督教大学国際宣教センター内に設置されている日本宣教リサーチ（2014年度）の発表によると、日本の教会の数は、カトリックが1000、オーソドックスが70。我々プロテスタント教会はおよそ8000あり、震災後には、東北各地に過去にない程のスピードで、新しく教会が生み出され、「コンビニの数まで教会を増やそう!」（50000教会）という教会増殖運動が起こっています。

東北だけではなく、全国各地で進行しているこの運動を見る時、そこには教団教派の壁を超えてネットワークしながら、それぞれの地域の宣教のために協力し合う関係が現場にあります。教会未設置の町々村々も、未だ数多くあるこの日本の隅々に、福音を届け、福音で満たし、福音中心の教会を生み出し、主の弟子をつくるために、ますます神様はネットワークを用いられていると感じています。

ネットワークで人づくり

日本宣教のために、私たちは積極的に働き人を生み出していく意識が必要だと思います。各教会の中では、それぞれのやり方で聖書の学び会や養育プログラムが行われ、神学校でも、神学生に対して聖書の学びや人格訓練などされていますが、さらに新しい形の人づくり運動に、これからの日本宣教、また海外宣教の可能性があるのではと私は思います。日本が宣教師派遣国として、他国を今までにないくらい祝福するのです。

現役牧師のための成長訓練スクールや、信徒のためのリーダーづくりスクール、ユースのための霊的成長スクールや国際人をつくるためのグローバルリーダースクール、社会人向けの技術宣教師スクールなどなど……。

多種多様なやり方、地域の宣教のための人づくり、地域の教会のための人づくりをネットワークで行うことは、大変益ではないかと思います。

ネットワークに必要なものとは?

私たちは、良く相手の事をあまり知らずに、他人から聞いた話しだけの情報で安易に批判したり、裁いてしまうことがないでしょうか?牧師批判や教会批判の話しを時々聞くことがあります。しかし、顔と顔を合わせて直接会って過ごしてみるとまったく噂と違うことがあります。直接会って話しをしてみなければわからない領域があると思います。

信仰の弱い者を受けいれなさい。ただ、意見を批評するためであってはならない。ある人は、何を食べてもさしつかえないと信じているが、弱い人は野菜だけを食べる。食べる者は食べない者を軽んじてはならず、食べない者も食べる者をさばいてはならない。神は彼を受けいれて下さったのであるから。他人の僕をさばくあなたは、いったい、何者であるか。彼が立つのも倒れるのも、その主人によるのである。しかし、彼は立つようになる。主は彼を立たせることができるからである。（ローマ人への手紙 14:1 ～ 4）

ローマの教会ではユダヤ人クリスチャンと異邦人クリスチャンの間で分裂が起きていたようです。そこには明らかな聖書理解の違いがありました。しかしパウロは互いに裁き合わず、主のために共に仕え生きることを教えています。ここにネットワークの本質があるような気がします。必ずしも聖書理解や神学が同じではなくても、ミニストリーや宣教の考え方が同じではなくても、同じ宣教地で同じ主に仕える者として、互いに直接会い話し合い祈り合うことがネットワークに必要なことではないでしょうか?

神と和解させ、互いの関係も和解させる福音が私たち教会を一致へと導きます。この福音のために、まずは自分からへりくだり行動に起こすものでありたいと願います。

全てのことを福音のために。

イベントレポート

イースター・フェスティバル

レポート：第27期生 福森 雄一

ハレルヤ !! 第27期生の福森 雄一です。5月7日の日曜日に、仙台市シルバーセンターで開催された「イースター･フェスティバル」に､音響の奉仕のスタッフとして参加させていただきました。

「イースター・フェスティバル」は、「仙台圏宣教協力会（S.A.M.A.）」が主催する伝道を目的としたイベントで、毎回様々なゲストを迎え、一昨年までは毎年5月に開催されていました。今回は2年振りの開催となり、ゲストとして、ジョン・ルーカス & JLファミリーがゴスペルを歌い、春風 笑一（はるかぜ しょういち）氏が腹話術を披露し、メッセンジャーとして、仙台富沢教会の阿部 頌栄（あべ しょうえい）牧師がメッセージを語られました。また、若者を中心とした超教派のミニストリー「Praise Station」の賛美チームによる賛美や、地元の大学生によるアカペラでの賛美歌合唱の時間もあり､あらゆる年齢層の方々がそれぞれに､キリストの復活の喜びの思いを､それぞれの形で表現した素晴らしい時間となりました。

東北中央教会からは、私以外にも、総合司会として木原成美さん、舞台監督として東海林 真さん、照明スタッフとして松本侑香里さん、音響スタッフとして倉持 守さん､佐藤 慎さんがそれぞれ奉仕スタッフとして参加しました。

阿部先生のメッセージは、マタイの福音書13章44節～46節の天の御国のたとえについての箇所で、農夫や商人が畑に隠された宝や、真珠を見つけると、全財産を売り払ってそれを買い取るというたとえで、ここでいう「農夫や商人」とは「神さま」の事であり、「宝」とは「救い」の事であるということでした。神は、私たちを「宝」として見ておられ、御子イエス・キリストをこの世に送り、贖いの代価として私たち罪深い人間の罪を買い取り、永遠のいのちを与えてくださったということ。そのいのちの尊さをイースターフェスティバルを通して､改めて見つめ直し､神さまが私たち一人一人を「宝」として見てくださっていることを改めて受け取り、その愛に応えて行く決心をする機会となりました。

ジョン・ルーカスさんのゴスペルのステージは、個人的に初めて見させていただきましたが、塩竈や、石巻などの各地から集まった複数のゴスペルクワイアがジョン・ルーカスさんのバックでクワイアとして歌い、主の愛に応える様に、一人一人の表情が喜びに溢れていて、横のつながりも愛に溢れていて、ゴスペルの持つ力を強く感じる機会となりました。

今回は初めての音響スタッフということで、不慣れな点もあり、学ばされることがたくさんありました。この様な場所で奉仕をさせていただく機会が与えられた事に感謝して、益々へりくだり、主に喜び仕える者と変えられていきたいと思います。

特別講義レポート

講師 ジョン・コー師

シンガポール／ペトラチャーチ

レポート：第25期生 佐藤 慎

5月9日～11日の3日間、シンガポールよりジョン・コー師をお招きし、特別講義を開いていただきました。

ジョン・コー師は、中国での伝道に力を入れており、現在中国では、爆発的なリバイバルの最中にあるそうです。しかし､その反面､聖書や信仰生活などについて､しっかり教育を受けずに牧師に任命され、やがてカルト化してしまうという問題が増えてきているそうです。その問題を解消するため、聖書の正しい理解や知識などを1年を通して教育し、現場に派遣するというプログラムを、今回は3日間に凝縮して講義していただきました。

この講義で私は「福音の本質」というものを改めて理解することができました。エペソ人への手紙の2章には｢**あなた方は恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行いによるのではありません。誰も誇ることのないためです**」とあります。私たちクリスチャンは何か特別なことをしなくても救われている! キリストを着させていただいている! 義と認められている! それは今、もう、すでに、その状態なのだということをもっと多くの兄弟姉妹に理解してほしいと願っています。そして皆さんの信仰生活がさらに自由で楽しい歩みになるようお祈りしています。

レポート：研修生 東海林 真

私はアルバイトの都合上、3日間の特別講義のうち1日だけしか受講することが出来ませんでした。しかし、そのたった１日だけでも､｢罪｣や｢救い｣､また｢福音｣や｢信仰｣､｢十字架｣など、どれも私たちクリスチャンには当たり前のことで、私自身も知っているつもりでいた事について、今まで以上に理解を深める事が出来、とても有益な時間となりました。そのなかで、ここでは「十字架」について皆さんにシェアできればと思います。

神様は「罪」を憎む方であり､その「罪」は「死」をもってでしか解決できません。しかし、神様は全ての罪ある人が失われる事は望んでおられない。だから、その贖いとして、全く罪のない完全な聖い人の命、つまりイエス様の「死」によって解決されました。

イエス様が受けた｢痛みと苦しみ｣によって私たちは｢癒され｣、イエス様は「退けられた」が、それによって私たちは「受け入れられ」、イエス様は「捨てられたもの」とされましたが、それによって私たちは「神の子」とされました。イエス様は「罪人」とされましたが、それによって私たちは「義」とされ、イエス様は「死なれた」が、それによって私たちは「命を得ました｣。本来なら私たちが受けるべき「罪の報い」をイエス様が身代わりとなって受けて下さったのです。それだけではなく、その身代わりによって私たちに良いものを得させてくださいました。しかも､この｢十字架の贖い｣は､全世界の､全世代の､全時代の、全ての人のためであって、その業は、約2000年前に完了しているのです。

この驚くばかりの愛と恵みの御業を､365日､24時間、いつも喜び、感謝し、また、あらゆる人に伝えていきたいです。

BOOK あらかると

永井信義

異端・カルト問題で日本のキリスト教会に貢献している、マインド・コントロール研究所のパルカル・ズィヴィー所長の最新著『“あわれみ”の心　イエスの道』（いのちのことば社）は、聖書の「あわれみ」について理解を深め、「あわれみ深い」生き方を実践していくための助けとなる良書です。

「『“あわれみ”の心を閉じないということ』、これは神さまがクリスチャンに与えた非常に大切な命令です。私たちクリスチャンは常にこの『“あわれみ”の心』を持つ必要があります。なぜそうするのでしょうか。それは、今日の多くの人々のように他の人の苦しみや痛みに無関心にならないためです。」